

モズク漁場に出現した雑藻

本永文彦・甲斐哲也

狩俣地区は、宮古圏域で唯一糸モズクとオキナワモズクの両方を養殖している、モズク主要生産地の一つである。平成19年1月下旬、一部の養殖業者から「狩俣湾内で本張りしているモズクに雑藻が付着して商品にならない」と連絡があった。持ち込まれたサンプルを見てみると、モズク藻体に、直径数ミリ程度の黒っぽい球のような雑藻が高密度で付着していた。低倍率で検鏡すると、球のように見えたのは、糸枝状の藻類の密生であった（写真）。持ち込んだ生産者は、この藻が付着したモズク網数十枚を直ぐに漁場から引き上げ廃棄し、被害の拡大を防ごうとした。この時点では、被害に遭ったのは一部の漁業者だけとのことであったが、3月の現場調査では、湾内に残っていたモズク網の多くにこの雑藻が繁茂しているのが確認された。雑藻がモズクに付着していなくても、網に付着しているケースも多数見られた。また狩俣湾外（宮古島北部東海域）では、わずかに同じ藻が確認できた程度で、大きな影響はなかった様である。雑藻は、モズクを容器内でもみ洗いするとある程度は剥がれ落ちるものの、収穫後の通常の洗浄工程でも完全に除去することができず、付着したモズクには食品としての商品価値がない。このため今期（平成18～19年）の狩俣地区のオキナワモズクの生産量は平年の1/4程度にとどまった。前年には宮古全域のモズク漁場でシオミドロやソゾなどの雑藻が漁期前半に多く見られ、漁獲への影響が心配されたものの、収穫までに消失する藻類で、大きな被害には至らなかった。

この雑藻が何であるかについて、普及指導員、研究員からいくつか意見があったが、現在水産海洋研究センターが専門家に同定依頼中である。

宮古の他地域、県内他漁場で、この藻による大きな被害はこれまでに報告されておらず、宮古地区の中でも狩俣湾モズク漁場だけで繁茂した理由も不明である。来期に同じ狩俣湾で再発生するのか、今期だけの異常現象なのか、また今後宮古島他漁場を含む県内各地でも発生する可能性があるのか全く予期できない状況だが、原因の特定、それによる発生の防止と発生後の対策が講じられてない現状では、今後もモズク養殖業の脅威となりうるのではないだろうか。



写真：オキナワモズクに付着した糸枝状の雑藻